◉外房勝浦川津港発↓勝浦沖

例年より早いスタート！デカスルメの数釣り期待

本誌編集部／近藤加津哉 Katsuya Kondo

前号（7月15日号）では、巻頭特集で城ケ島沖のスルメイカを取り上げたが、ほかのエリアの動向も気になるところ。外房勝浦沖では6月下旬にトップ60杯オーバーの釣果が出たと聞き、さっそく勝浦川津港の不動丸から様子を探ってきた。

取材日は6月27日。事前に状況を伺うと、「よかったり悪かったり」とのこと。ただしスルメのサイズはよく、プラヅノは18センチのみでOKだそう。今回はピッカピカ針18センチ10本の直結仕掛けで挑むことにした。

▲外房のスルメイカもいよいよ本格シーズンイン

イカのいる層を探す

勝浦沖では6月上旬までヤリイカが釣れていた。本来ならしばらく空いてからスルメイカが釣れ出すことが多いが、今年はそのままスルメに移行したそうで、かなり早いシーズンインとなった。

当日は筆者含め6人の釣り人が乗船。前日までの釣果はトップ10杯前後とちょっと低調気味。ただし、突然よくなる可能性があるのもこの釣り。そんな希望を抱いて4時過ぎに出船し、航程30～40分の勝浦沖を目指した。

ポイントの水深は130メートル前後。すぐに吉清晃朗（きちせいてるあき）船長から投入の合図が出た。

「100メートルくらいのところにちょっとした反応が出ています。サバかもしれないけどやってみて」

どういった状態か船長に聞いてみると、パッと見てスルメイカの反応が出るというよりは、サバやイワシなどの反応にイカが着いている模様。その中からイカを掛けていく、というイカ探し的な釣りのことが多いという。そしてたくさんのイカがいれば大流しで数釣りが可能になるとのこと。

船長から出る指示はあくまで目安。その中からまずはイカがいるのかどうかをみんなで探していく。

開始から30分ほどはサバが仕掛けに触ってくるくらいでイカは乗らず。

「イカが触ったよ」

左舷ミヨシの山下さんがリールを巻き始める。どうやらベタ底だった模様。反対側の仲乗りさんも同時に乗ったようだ。山下さんは1杯、仲乗りさんは2杯とまずは型を見たが、それから続かない。

流し変えるとたまにベタ底で単発で釣れるぐらい。数日前から潮の流れがなく、イカの活性が上がらないようだ。まだ船中で10杯に満たないが8時過ぎに参戦してみた。

船長からの指示はやはり同じで、100～130メートルを探るようだ。落下中に100メートルでストップしてシャクリを入れる。すると竿先がプルプル。これはサバだ。105メートルでストップすると竿先が上下に小刻みに震えるがこれもサバ。

▼ポイントは勝浦沖の水深130メートル前後。100メートルから海底までを探る

そして110メートルでストップしてシャクリを入れるとズン！ とした感触。すかさず合わせを入れるとズシンと重量感が伝わってくる。いたいた！ とニヤニヤしながら巻き上げてくる。サバの群れの中からスルメを探すとはこういうことか！ これはこれで面白い。まずは1杯ゲット。

次投では105メートルでストップ、シャクリを入れるとズン！ 今度はいきなりスルメイカだ。合わせを入れて中速で15メートルほど巻いてきたら途中でさらにズン！ ここで追い乗りだ。2杯だけど、イカのサイズがいいので重量感があって快感だ。

周りでもポツポツと乗りがあるようで、大ドモの鈴木さんは2杯、山下さんは3杯掛けを達成。

知っ得！ Tips and Tricks

勝浦伝統のヘラ針ってなんだ？

勝浦沖のスルメイカ釣りで昔からよく使われていたツノがある。歯ブラシの柄のような太さのプラヅノで「ヘラ針」という。当地での実績は高く現在でも多くの人が使っているが、実はすでに廃盤製品で大型釣具店などで正規に入手するのは難しい。眠っていた在庫が放出されたりすると入手できることもあるが、メーカーによると今後も製造する予定はないそうなので、見つけたら迷わず買いですよ！

▲まるでカラフルな歯ブラシのようなヘラ針

•Tackle Guide

道糸と仕掛けの間に竿の全長程度の先糸を付けておくと、取り込みが格段にスムーズにいくのでおすすめ。取り込み時に穂先いっぱいまで巻き、竿を立てて先糸をつかみヨリ取りリングを船べり内に入れられる。大型が多点掛けするようなときは幹糸は上側の3～5本程度を14号と太めにしておくと安心。ツノ数は自分で扱える本数にしよう。

ラストに4点掛けも

仕掛けの落下中に触りがなければ一度海底まで落としてみる。海底付近で大きくシャクリ上げ、ストンと落として誘いを入れてみるがこちらには反応なし。

そこで次は20～30メートル上まで探っていくのに電動ただ巻き作戦を敢行。電動リールのスピードを13にしてただ巻いていくだけ。すると110メートルくらいで竿先がお辞儀する。そのまま竿を持ち上げるように合わせるとズン！

その後も上から落とし込んで探って乗らなければ、海底から電動ただ巻きを繰り返すと、1杯ずつだけど連チャンでき、1時間ほどで8杯のスルメイカをゲット。

「どうやって釣ってます？」という鈴木さんに「電動ただ巻きの横着作戦です」と伝えるとすぐに鈴木さんから「電動ただ巻きで乗りました！」と、どうやらこの日にマッチした釣り方だったようだ。

夏のスルメイカに相応しい船上風景にしようと、山下さんと私は素早くイカをさいて干していく。

前半はほとんど写真がないのでここからはしばらく撮影に専念する。流しの時間はそこそこ長いが、やはり単発が多くなかなか数はのびない。

「イカはいるんだろうけど、自分で乗る場所を探せないとなかなか難しいよね」と船長。

しばらく流してだれにも乗らなくなると再び探索して投入の合図が出る。9時以降はしばらく沈黙が続いたが、ラスト1時間くらいでまた乗るようになってきた。

落下中には探ってもなかなか乗らず、海底から置き竿にして電動ただ巻きしてみる。

竿先をしっかり見ていると、ズンとモタれるようなアタリが出る。すかさず竿を手に取り持ち上げて合わせを入れる。少しフワフワしたような感触があり、巻き上げ途中にバレてしまった。

乗りがいいときはしっかりと抱きついてくるが、乗りが今イチのときは、触腕をサッと出してツノに引っ掛かっただけのことも多い。こんなときはバラシが多くなる。

置き竿で乗せているので掛かりが浅い。やはり手持ちでしっかりと感触を確かめながら釣らなきゃダメですね。

そんなことをしていたらバラシが多く10時半までに2杯を追加するのみとなってしまった。挙げ句オマツリでプロペラに引っ掛かってしまい、水深分の道糸と仕掛けをすっかりロストして筆者はここで納竿に。

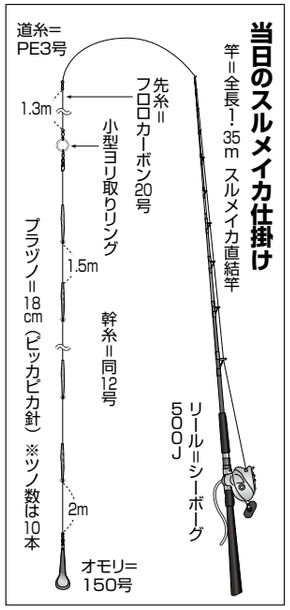
みなさんはラスト1時間。やはり単発が多いもののポツポツと上がっている。そして最後の流しで鈴木さんから声がかかった。

「かなり重たいです」と上がってきたのは当日最高の4杯掛けだった。ずっとただ巻きで触りが出たら掛けていく釣り方を続けたそうで、最後に最高の結果がやってきた。

ミヨシの山下さんもラストに2杯追加して、鈴木さんとともに16杯でトップ。釣果としては今一つだったが、サバ反応の中からスルメイカを探し出して掛けていく、勝浦沖のスルメイカの特徴が一つ分かって大変意義のある釣行となった。

この日、長年愛用していた直結竿にヒビが入ってしまった。今年は久びさに本格的にやりたいと、帰宅後早々に直結用のニューロッドを注文。次回は多点掛けをしっかりと味わいたいものだ。

勝浦沖にイカはいるようなので、潮の流れ次第では大釣りもありそう。釣果が出たら即釣行です！



▲梅雨明けして晴れ間が多くなったら船上干しを作ろう！

◉船宿information

外房勝浦川津港
不動丸
☎0470-73-5538
（詳細は巻末の情報欄参照）

吉清 晃朗船長

▶料金＝スルメイカ乗合一人1万2000円（氷付き）
▶備考＝予約乗合、3時半集合。
ほかにSLJにも出船